

るは是切餅也、饅三月半輪の餅欠は炙饜に焼て喰はれ、再明き樽となり、やくざもの、寄合に入り、がくそく病身になりしも、淺漬澤庵老のヒの鹽加減にて、又世に出しは、全く醫師のおもしろ利たるなるべし、かくさまく、移りかはりゆく一生の身のほどをおもひ合せて、おのが名のたる事をえれかし、

〔貞丈雜記七酒盃〕一。大鼓樽と云物、むかしよりありし物にて、急度したる物にてはなし、進物にもせざる也、節用集永正天文の比之記に云、大鼓樽見たり、

大鼓樽頭書の形は、舞樂の大鼓の形にて、上の寶貨の所を口にしたる也、口は常の如し、此圖梅津長者といふ繪卷物に見ゆ、

〔大江俊矩記〕文化六年十二月八日甲午、非藏人中贈物酒肴、予催之、貳升入大鼓樽壹、重組三重、中略右之通也、

〔世事百談〕樽人形

ある人の説に、延寶、天和の頃のものにやとおもへる、浮世繪を見しに、そのおもむき遊女のごとき女の、小き樽に衣をうちかけ、編笠をきせたり、おもふに酒宴などの席にてのたはむれにて、遊女のもてあそびとのみおもひしに、寶曆七年の印本に、繪本咲分櫻といふ冊子に、こゝに載する圖○圖略 あれば、そのころも猶この戯れありしこと、見えたり、これによりておもへば、遊女のみのことにはあらで、なべて花見野がけなどのをりから、興じもてあそびしなるべし、ある日柳亭翁に、この樽人形のゆるよしをとふに、翁いへらく、一老人の話に、むかし人形樽といひしものあり、野遊などに持ち行くとき、ふくさやうのものに包めば、その形木偶に似たるをもて、名を負せたり、さてその樽に小兒の小袖、または羽織など打ちきせ、人形廻しの戯れをなし、がつひにひとつの遊戯となりて、はては酒をいゝ、事をば用とせず、木偶まはしにたよりよきやうに作り、